

第 42 回 設楽ダム魚類検討会 議事概要

1. 工事の進捗状況について

- ・ダムサイト付近の現在の工事状況を報告した。
- ・本体工事にあたり川の流れを迂回させる転流を令和5年2月頃に予定していることを報告した。

2. ネコギギ保全のロードマップ見直しについて

- ・事業工期の変更によりネコギギの移植が必要となる試験湛水までの期間が延伸したため、その期間を有効に活用したネコギギ保全のロードマップの見直し案について報告した。
- ・移植対象集団の個体数はこれまでの調査結果から減少傾向にあることから、早期に採捕を行い遺伝的な系統を確保することにより多様性を最大限に活かした飼育繁殖を行う。これにより得られた個体を移植する計画について了解を得た。
- ・また、遺伝的な系統を確保した上で採捕した自然淵へ個体を戻し、その戻した個体とその自然淵で繁殖した個体を、後に採捕し直接移植淵へ放流する計画について了解を得た。
- ・遺伝的な系統の保全のありかたについては、引き続き検討することとした。

3. モニタリング調査及び飼育繁殖結果について

- ・R4年の生息状況調査の結果、豊川流域の推定個体数は、前年に引き続き減少傾向であることを報告した。
- ・経年的な個体数変化の要因について、環境要因に加えて人為的な要因等も考慮して、関係性の解析を試みることを報告した。
- ・現状の生息適地（ネコギギが生存、繁殖及び存続できる場）評価は、各支川における出水による外力の評価の精度が荒いと思われるため単純な流域面積比でなく各支川ごとの雨量や地形地質などの流出条件を踏まえた流出計算を外力とする必要があるとの意見をいただき、出水による外力の設定を見直すこととした。
- ・R4年の飼育繁殖では、系統保全及び放流実験に必要な個体数が得られたことを報告した。
- ・放流計画に関して、多様な遺伝的家系の個体を放流していくことが、放流先の環境に適した個体が自然淘汰により生き残り個体群を形成していくために好ましく、また家系の偏りが生じていないかを詳細にモニタリングしながら計画を実施していくのがよいとの意見をいただいた。
- ・遺伝的な系統を確保するための飼育繁殖においては、延伸した期間を活用し、体長や行動が自然条件下での淘汰に関わるかを明らかにすることで、より自然状態に近い多様な個体を繁殖させることができないか検討できるとよいとの意見をい

ただいた。

4. 環境改善の実施計画について

- ・ 生息適地評価に関して、GLM（既往調査成果より得られた淵の物理環境とネコギギの生息状況に係るデータを対の変数とした回帰分析モデル）による予測結果と実際の繁殖率にギャップが見られている。この要因として、実際の河床地形データが不足していることが考えられるとの意見をいただき、不足している河床地形データを確認し測量を追加して再解析を行うこととした。
- ・ 環境改善手法の見直しとして、GLM を軸に、現場の所感や経験則、流況解析、餌生物や捕食生物等の生息状況、人の河川利用状況、他流域への汎用性など、これまで定量化されていない点にも留意した環境改善箇所の設計を実施中であることを報告した。
- ・ 環境改善は GLM の予測結果に基づいて進めるのは良いが、目標設定などはモデルの結果に縛られすぎない注意が必要であるとの意見をいただき、モデルの結果以外に淵の特性や連続性、河川の特性などを踏まえて、よりネコギギが持続的に生息・繁殖が可能となる環境改善手法を検討することとした。
- ・ 実施計画を作るにあたって、環境改善を行う淵の選定理由、改善手法、改善後の評価やフィードバックを示した環境改善が計画的に行われているかを可視化できるロードマップを作成する必要があるとの意見をいただいた。

5. 流域保全の取り組み状況について

- ・ R4 年に、ネコギギ保全や河川環境に関する環境学習会を 2 回開催したこと、また地元漁協イベントにてネコギギ保全に係る啓発活動を行ったことを報告した。
- ・ 地元学校との地域連携の取り組みは非常に良い。他流域での取り組みとの連携も企画してはどうかとの意見をいただいた。
- ・ これまでの知見を活かし、地域が生息地の監視や観察を行えるよう、漁協など地元団体と協働してゆく方針とすることを報告した。

以 上